

■ 「私が学んだ人生を成功に導く様々な方程式」 — 人間として「幸せ」になるために !!

・A(成功) = X(仕事) + Y(遊び) + Z(沈黙)	[アインシュタイン]
・人生・仕事の結果 = 考え方 × 熱意 × 能力	[稲森和夫] (11月号参照)
・成功 = (情熱 + 人間力 + 仕事力) × 運	[新 将命] (次々頁 参照)
(パッション) (マインド) (スキル) (ラック)	
・仕事の成功 = 志 × 意欲 × 才能 × 魅力	[岬 龍一郎] (右 参照)
(大志) (情熱・熱意) (努力) (人徳・人柄)	

■ 自分なりの「成功の方程式」をつくるためになすべきこと

成功への第1歩は、自分なりの「成功の方程式」をつくり出すことです。先人達は、「運」や「志」(情熱・熱意)などをKeyワードとしています。仕事、人生の成功の方程式をつくらうと願うなら、どう「仕事」に向き合うか、その第1は、仕事に没頭して見ることです。目の前の仕事をとことんやる。つぎには、その仕事を好きになろうとする。そしてその仕事を楽しむようにできれば最高です

只、凡人の我々は、仕事を労働として義務的にやるから、楽しむ前に苦勞をしてしまいます。デール・カーネギーは、「一見大したことの無い仕事でも、思いきって全力を注ぐことだ。仕事を一つ征服するごとに実力が増していく。小さな仕事を立派に果たせるようになれば、大仕事のほうはひとりで片がつくようになる。」との言葉を残しています。更には日々一所懸命！ しかしながら「忙中閑あり」を忘れず「ゆとり」を持つことが大切となります。

岬龍一郎氏(人間経営塾 主宰)は、仕事を達成するには、まずは仕事を成し遂げようとする「意欲(情熱・熱意)」が第一で、ついで「才能」とそれを向上させる努力、さらには周囲の協力を得られる「魅力(人徳・人柄)」がなければ達成できないが、これらのすべてのことも、「志(大志)」がなければたいしたものとならないとの方程式を導き、日々の指針とされています。

■ [^{にんじゅうふげ}忍終不悔 ^{だいまりょうじゅきょう}の教え] — 浄土三部経 [^{たんぶつげ}大無量寿経 (嘆佛偈)]

私の座右の銘の1つである「忍終不悔」の教えとは、志を高く持てば、必ず孤独や忍耐を強いられるという意味です。孤独・苦痛・誹謗中傷も含めて、志が高い分苦勞を背負い込むことは当然だと説いています。そして、志半ばで終わることもあるのだという覚悟をもち、たとえそうなったとしても、決して後悔をしないという心構えを説いた言葉です。明治維新の偉人である西郷隆盛や大久保利通などは、絶えず忍終不悔の言葉を嘯み締め、志に精進し、志半ばで倒れたものの、微塵の後悔もしていないと言われています。

不悔とは、決して後悔しないという、断固たる志を持った人しか使えない厳粛な言葉です。志を持つということは単なる観念では駄目で、その志のためにチャレンジし、行動し、理想と現実のギャップに耐え忍ぶ決意が大事なことのように思います。

本年もあすなろ会の皆様には多大なるご支援を頂きまして誠にありがとうございました。国内においては、新型コロナウイルスの感染状況は、落ち着きを取り戻しているものの、世界に目を向ければ、ワクチン接種の先進地域で感染が再拡大しており、いかに With コロナ時代を進むべきか、先の見えない重い課題を背負ったまま、新しい年を迎えなければならない状況です。又、業界においてもウッドショックによる資材不足、価格高騰の波がまだまだ収まる状況ではありません。改めて自身の志を問直し、「忍終不悔」の覚悟を持たねばならないと思います。来年も皆様と1歩1歩前に進めるよう努力して参りますので、ご愛顧の程、宜しくお願い致します。

■ 「志」を持って仕事に従事する。人生における成功の方程式

『仕事を達成するには、まず事を成し遂げようとする意欲が第一であり、ついで「才能」とそれを向上させる「努力」、さらには周囲の協力を得られる人間的「魅力」がなければ物事は達成できない。しかし、これらすべてのことも、「志」がなければたいしたものにならない。』

■ 「志」を立てることからすべてが始まる — 偉人たちが残した「志」の名言

【人間としての尊厳を持って自分自身の道を正しく生きるための大志】

“ Boys, be ambitious! Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be . ”

(青年よ大志を抱け。それは金銭や我欲のためにではなく、また人呼んで名声という空しいものためであってはならない。人間として当然そなえていなければならぬあらゆることを成しとげるために大志をもて)

『ウィリアム・スミス・クラーク』

「志」といえば、クラーク博士である。この名言は「大志を抱いて立身出世しろ」との意味に使われるが、なにも立身出世しろとか、名声を上げろとか、そのような世俗の功名を求めたものではない。むしろそれとは反対に、「人間として当然身につけなければならないもの」、人間が人間として尊厳を持って生きるための「道徳律」を身につけ、自分自身の道を正しく生きろと説いたのである。

【人は皆、勇ましく高尚なる生涯を残すことができる】

“ 我々が五十年の生命を託したこの美しい地球、美しい国、この我々を育ててくれた山や河、我々はこれに何も遺さずに死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝きたい。それならば我々は何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これいずれも遺すに価値あるものである。しかし、これは何人にも遺すことのできるものではない、またこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大の遺物はなんであるか、それは勇ましい高尚なる生涯である。”

『内村鑑三』(後世への最大遺物)

内村のいう「勇ましい高尚なる生涯」とは、大事業を興せとか、歴史上の人物になれとか、そういうことをいっているのではない。高尚とは尊い生き方ということであり、社会のために自分がやる気になれば生涯を通して実行できることを、あとに続く人々への遺産にしろといっているのである。自分がまず始めることで、いつの日か世の中が美しくなる。そのことを「志とせよ」と教えてくれている。

【一生を懸けた思いこそが大志である】

“ われ、太平洋のかけ橋とならん ”

『新渡戸稲造』

札幌農学校を卒業した新渡戸は、明治十六年(1883年)東京に戻り、東京帝国大学に入学した。このとき文学部教授の外山正一博士の面接を受け、「あなたは何のために勉強するのですか」と聞かれ、それに答えたのが、「われ、太平洋のかけ橋とならん」という言葉である。教授にはその比喩がわからなかったのか、新渡戸は改めて、「日本の思想を外国に伝え、外国の思想を日本に普及する媒酌人になりたいのです」と答えている。学問の目的は立身出世のためではなく、世の為人の為にあるというのが信条であった。又、生涯の目標とした「太平洋のかけ橋とならん」とする仕事では日米交換教授としてアメリカの六大学で日本文化を講義し、大正九年(1927年)から同十五年までは国際連盟次長として活躍した。志を立て、その道をまっすぐに努力することがいかに大切なことか、新渡戸は著書『武士道』、『修養』、『自警録』などでもそれを実践したのである。